2009年（平成21年）
第22号
（10月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会５０年の歩み（８回目）節目の教会発足５０周年を目指して

■５０周年へ向けてスタート宣言

教団では「一人ひとりの心田を耕す」を総合目標に掲げ、会員一人ひとりの修行のあり方を示してきた。滝瀬恵一教会長は、法座修行を通じて、一人ひとりの心の立て直しに力を入れてきた。

その積み重ねにより、平成１５年１１月２３日に、庭野欽司郎先生を招き、壮年部結集大会が盛大に開催された。そして、翌年には、京都普門館建設１０周年を記念して、３月２７日、４月３日、１０日、２４日、各界から講師を招いて、内外の方々に向けて、記念講演会を開催した。

そして、平成１６年は京都教会発足４５周年にあたり、１１月に開催された４５周年記念式典では、５年後の５０周年に向けた「スタート宣言」を発表した。会員が救われた喜びを、多くの人に広げることを誓い、５０周年を迎えようというものだった。

こうして、平成１６年１２月、滝瀬恵一教会長は高崎教会に転任し、代わって大和教会長（神奈川県）の中村憲一郎が新しく赴任することになった。

■信仰新生、真の仏教者を目指して

中村教会長に代わって迎えた平成１７年は、開祖生誕１００年、第８回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰⅧ）開催の前年だった。この年、会長先生が全国を回られ、会員に「信仰新生」を説いて回られた。

６月１２日、近畿ブロックの会長先生のご指導会が京都教会を会場として行われた。参加した会員は、自分たちの信仰のあり方を発表し、会長先生から指導を受けた。そして、開祖の願いを我が願いとし、法華経精神（一乗の精神）に則り、すべての人々の幸福を願い、修行精進することを確認した。

■ＷＣＲＰⅧが再び京都で開催

そして、平成１６年８月２６日から２９日、京都国際会館にて、第８回世界宗教者平和会議が開催された。第１回の会議が１９７０年（昭和４５年）に開催されて、３６年たって、再び京都を会場として開催された。しかも、開祖生誕１００年の年と重なり、この奇縁に神仏のはからいを感じた人も多かったことだろう。

一食をささげる運動

●一食研修ツアー～日本国内における難民支援～

青年本部、教務局社会貢献グループによる「一食研修ツアー～日本国内における難民支援～」が９月１１、１２の両日、東京・新宿区の四谷地域センターなどを会場に実施され、会員１９人が参加した。一行は１１日、立正佼成会一食平和基金と特定非営利活動法人「難民支援協会」が合同で進める「国内難民支援事業」について学び、日本で暮らす難民の現状に理解を深めるとともに同事業の成果などを確認した。このあと、港区にある東京入国管理局を見学し、日本の難民制度などに関して説明を受けた。

翌１２日には、群馬・館林市文化会館で、軍事政権から迫害を受けて逃れてきたミャンマーの少数民族「ロヒンギャ」の人々と交流。社会的、経済的に不安定な状況の中、同協会の支援を受け、難民申請を行い、認定を待つ人々から話を聞いた。

【参加者の感想】

これまで「難民」と聞くと、どこか遠い国の人々のことを想像していました。しかしツアーへの参加を通し、自分の身近で厳しい生活を送っているという事実を知りとても驚くとともに、私たちの献金が彼らの生活の支えとなっていることを実感できました。今後はツアーでの体験や難民の現状、「一食運動」に込められた精神をより多くの人にお伝えしていきたいと思います。

時事刻々

ノルウェーのノーベル賞委員会は九日、ノーベル平和賞を「国際協調外交を推進した功績」で、米国のバラク・オバマ大統領に授与すると発表した。特に、オバマ氏が核兵器の全廃に向け外交交渉を開始したことが評価されたという。

オバマ氏は大統領就任一年足らずで、具体的な実績はないと批判もあるが、今後の世界平和や地球温暖化防止への期待が込められたものだろう。

とかく私たちは、結果や実績を気にしすぎはしないだろうか。今回のオバマ氏の受賞は、高い目標を掲げ、その実現に向けて努力することの大切さが評価された。私たちも結果よりもプロセスを評価していくようにしていきたい。

京都教会発足五〇周年記念式典が半月後に開催される。五〇年という結果を祝するだけでなく、今後、本会の使命や自分たちの役割を果たすために取り組むことが大切だと考える。

京都教会発足５０周年事業の取り組みについて

あと半月、１１月１日に京都教会発足５０周年記念式典が開催される。この式典をもって、１年間取り組んできた発足５０周年記念事業の締めくくりとなる。

この１年間、京都教会では、「光・絆・翔（はばたき）」をテーマに取り組んできた。５０周年を迎えることができたのは、その第一歩を踏み出した人から始まる。開祖の教えにより、人としての本来の生き方に目覚めた人は、きっと光り輝いたことだろう。だから、最初に「光」があった。

その「光」にふれた人が、また光り輝き、仲間が増えていき、その「絆」が深まってきた。こうした仲間が力を合わせて、世のため、人のためと力を合わせて、様々な活動に取り組んできた。一人ひとりの力は小さくても、みんなが力を合わせて、力強くはばたいてきた。「翔」

こうして、今の私たちが存在する。だから、私たち自身も「光」、周りの人たちとの「絆」を深め、そして、平和で住みよい地域社会や世界に向けて「翔」いていくことを誓う、ということをテーマにしてきた。

中村教会長は、このことを木に譬えて「今の私たちは木の幹です。これまで教会を支えてくださった方々や私たちの先祖は根っこです。根っこがなければ、木は枯れてしまいます。だから、根っこに対する感謝を忘れてはいけません。そして、枝葉は、これから京都を支えてもらう人たち、私たちの子や孫たちです。枝葉に対して十分な養分を送り込むのが幹である私たちの役割です。」と述べている。

こうした考えに基づき、今年の前半は、５０周年を迎えることができたことに対し、これまで支えていただいた方々（根っこ）への感謝と、今ここにいる私たちの絆を深める（太い幹）ことに力点を置いて取り組んできた。

そして、次の段階である。これから教会を支え、地域や日本、世界を支える人たち（枝葉）に、バトンタッチしていく。

だから、５０周年記念式典は単にお祝いする機会とするだけでなく、１００周年に向けて、新たな第一歩を記すものにしていきたいと考える。

全国明るい社会づくり運動「サポーターの集いｉｎ近畿」

去る９月２６日大阪科学技術センター（大阪市西区）に於いて全国明社「サポーターの集いｉｎ近畿」が行われた。近畿ブロックのうち大阪、京都、滋賀、兵庫、奈良、和歌山明社から計５０名が参加した。

はじめに７月に新潟で行われた集会のＤＶＤ放映をした後、全国明社斉藤理事長から「今後の明社の方向性と目指すもの」と題した基調発題があり、全国明社の役割や事業の報告などがあった。基調発題を受けてグループ討議を行い、さまざまな意見が出された。

・全国明社のメリットを活かした活動を進めたい。
・立正佼成会との関係に課題がある。
・地域との繋がりが薄い。
・環境問題に取り組んでいきたい。
・現在家庭教育に取り組んでいる。
・宗教協力に注力している。
・地域の種、縁の下の力持ちに徹したい。
・後継者が育っていない。
・青少年活動に注力したい。　など

最後に斉藤理事長から、環境に関する活動が多いため全国のネットワークを活用・共有して家庭でも出来ることから実行することや地域に浸透することの要望があった。また後継者問題に関しては魅力ある運動にすることがポイントであるとした。これらは各府県明社に持ち帰り、内容を十分に検討することとの講評があった。

２時間のグループ討議後は場所を移して交流懇親会を行い、ギター２重奏や余興などで参加者は親交を深めた。

今回は「諸宗教対話～開祖の願いをこの京都の地に～」をお休みとさせて頂きます。

他教団活動紹介　（中外日報１０月１０日より）

●「紀伊山地三霊場会議」発足

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された「吉野大峯」「熊野」「高野山」の三霊場の１５寺社でつくる「紀伊山地三霊場会議」が発足、その開創法要と第１回総会が６日、金峯山修験本宗金峯山寺で行われ、総裁に松長有慶高野山真言宗総本山金剛峯寺座主、副総裁に朝日芳英熊野那智大社宮司、代表幹事に田中利典金峯山寺執行長が就任した。

京都教会　あの日あの時

昭和６０年頃

当時５月の青年の日といえば包括地域全域で青年部が中心となってユニセフ募金活動を行っていました。これは募金当日出発前の一コマです。現渉外部スタッフも数名写っていますね。

５０年前（１９５９年）の出来事：１０月にニッポン放送がラジオの２４時間放送を開始しました。

仏教を生活に生かす

《願いに沿って生きる》

庭野開祖は「人間は、いくら幸せになってもいい。幸せになったら、その功徳をみんなにお分けすればいいんです。そうすれば、もっと幸せが増えるから」と、言われました。それは毎日の生活の中で、小さな幸せ、小さな喜びを発見し、その喜んでいる心をそのまま口に出してみることから始まります。

どんな小さな喜びでも、それを言葉に表し、人に伝えてみることで、驚くほどまわりを温かく、幸せに変えていきます。すると自分自身が、仏さまの説かれる法をより深く実感できるようになるのです。

「自分は仏さまに生かされているのだ」ということを自覚し、「生かされているからには、生かされているように生きよう」と覚悟することが大事なのです。

幸せになるために、幸せを実感するためにこそ、私たちは修行をします。それは立正佼成会に入会したからやらなくてはならないものではなく、皆、私たちを助けてくれるもの、生かしてくれるものなのです。

不平不満を言ったり、人を恨んだり、苦しみ悩みながらでも、生きていくことはできます。けれども、それでは喜びのない、辛い人生になってしまいます。そこで庭野開祖は、どうすればすみやかに、回り道をせずに、仏になる道を行くことができるか、幸せになれるかを教えて下さったのです。

人間の魂は無限に(仏となるまで)向上していくべき本質を持っているのであって、この世に生きるのは、そこで魂の修行をするためなのです。

「自分を後にして、人のために動いてごらん。親に感謝してごらん。忙しい中、時間を作ってご供養してごらん。そういう心になれば、安心して生きることができるよ。喜びの多い人生が歩めるよ」これが、庭野開祖の処方して下さった良薬です。けれども、行いは、あくまでも自分の心を伝える手段です。実は心が勝負なのです。庭野開祖がその人生で示して下さったのは、自分の仏性に気づき、人さまの仏性を発見する法華経の「修行」です。

それは、みんな一緒に、光の速さで目的地まで連れて行ってくれる乗り物のチケットのようなものです。私たちは庭野開祖からチケットを頂いて、バスや電車から、光の速さの乗り物に乗り換えることができるのです。世間の常識から見れば、理想論のように思えるかもしれない法華経の修行を信じて、仏さまの願いである「仏性を開く」という一点に向かう流れに乗ってみると、思いもよらない結果が現れてきます。「ご供養」「導き・手取り・法座」「ご法の習学」という基本信行も、その行いを通して仏性を発見するという、ご本仏さまの願いに沿って生きるための修行なのです。

お線香を何本灯したから、朝から一生懸命三部経を何時間も読んだから功徳ができると思っていると大間違いで、三部経の中の意味をかみしめて、どのように自分の生活に生かしていくかということが、大切なことです。

あるご夫婦がいました。奥さんが白血病と診断された直後、そのおなかに命が授かりました。嬉しいことのはずなのに、無事に子供が育つのか、また、出産すれば奥さんの命も危ないという不安のなか、ご夫婦二人で庭野開祖にご指導を頂きました。

「まず人さまの幸せを念じなさい。同じような境遇の人たちに、仏さまの教えを夫婦でお伝えすることですよ」悩み苦しみのあるままで、人さまの幸せを願って生きていく。なかなか考えられることではありません。けれども庭野開祖は、欠けることのない幸せを見いだし、満たされて生きる生き方を教えて下さったのです。

庭野開祖の言葉を信じて、苦をそのまま宝物にして生きようと思えたこのご夫婦は、同じような悩みを持つ人の幸せのために教えをお伝えし、生きがいを持って生きていかれたそうです。人間が生きていくというのは、喜びと苦しみをくり返し味わうことです。不安や苦しみを除くためだけの修行では、苦労のたびにあわてて修行する、そのくり返しで人生が終わってしまいます。人を救うとは、つまり、本当の生き方に目覚めさせることなのです。

神様や仏様に何かをかなえてもらおうという祈りは本当ではない。神さま仏さまの願いに沿って生きるということ、そのための祈りが大事なのです。

仏さまの願いに沿って生きるというのですから、**どんな苦労も努力であると思い、慈悲行だと思えばいいのです。**だれか一人がそう思えれば、それはそのままで幸せのもとになります。苦しんだり悲しんだり喜んだりしながらも、それでも人と出会い、互いに縁となって生かされているのは、この人生で出会う「縁」を通し、慈悲行をして幸せになるためなのです。

尊い功徳を人さまにお分けすることで、自分が生かされるのです。生きていることがそのまま修行で、そのまま救われだとも言えるでしょう。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《必ず道は開ける》

第２回世界宗教者平和会議の開催に向けて、ヨーロッパの宗教者を訪ね歩いていた庭野開祖であったが、候補地の西ドイツ開催が、決まりそうでなかなか決定しないのである。逆に、だんだん雲行きが怪しくなってきた。たまたま不幸な事件が起こった。１９７２年に西ドイツのミュンヘンで開かれたオリンピックで、イスラエル選手団に対するアラブ過激派によるテロ事件で１６人もの死者が出る、という痛ましい事件が起こったのである。

「世界の宗教者を集めて、もしものことがあっては」と、西ドイツの宗教者が危惧を抱いたのも当然だった。それともう一つ、第２回世界会議を開く予定の昭和４９年に、西ドイツでプロテスタントの大きな会議が開かれることが、すでに決定していたのだ。同じ時期に世界会議という大きい会議を開催するのは難しい、という事情も重なった。

そうしてついに、第２回会議の西ドイツ開催は不可能、という結論が出てしまったのである。急遽、開催地を他に捜さなくてはならない。地理的に見てヨーロッパの中心であり、欧州共同体（ＥＣ）の本部が置かれているベルギーの首都ブリュッセルが、候補地として浮かび上がってきた。だが、ベルギーの宗教界にとってみれば、いきなり世界宗教者平和会議のような大会議の開催を打診されても、時間的にも経済的にも、すぐにＯＫを出せるものではない。

日がどんどん過ぎていき、「第２回会議は、はたして可能なのか」と役員たちは次第にあせりをつのらせ、顔を曇らせた。不安が胸をよぎり、じっとしていられない思いになってきたのだった。しかし、庭野開祖はそれほど心配しなかった。みんなの顔が曇れば曇るほど、明る明るい笑顔でみんなに話した。

「世界中の宗教者が集まって善いことをしようとしているのに、それができないわけがないじぁありませんか。私たちの心が神仏のみ心にかなうものであれば、必ずご守護があるはずです」。庭野開祖は、いつもそういう考え方をするので、よく、こんなふうに聞かれることがあった。「あなたは、いつも楽観的だが、どうしてそんなに楽観的でいられるのか？」

庭野開祖の考え方はまことに簡単で、**「仏さまの教え通りに精一杯実践していれば、必ず神仏がご守護して下さって、おのずと道がついてくるはずだ」**そう信じきっていた。結果を神仏にお任せしてしまえば、あとは、自分にできる精一杯の努力をすることしかない。そして、出てきた結果が仏さまの答えだと信じきるのだ。迷ったり、才覚したりすることはいらない。すべてお任せしてしまった方が、あれこれ迷わず自分の力を精一杯発揮できる。

庭野開祖は若いころ、東京・中野の新井薬師の縁日で手相を見てもらったことがあり、その時に易者から「君は刺激があるとどんどん成功するが、平穏無事だとだめだ。刺激を受けて、それを乗り越える積極性が君を成長させてくれる」と言われた。根が楽観的な庭野開祖は、たいがいのことは「まあ、そのうちどうにか解決がつくだろう」と考えてしまう。だが、のっぴきならない問題を突きつけられると、のんびりしているわけにはいかない。「よし、なんとかしなければ」と力がわいてくる。

そのことに気付いてから、困難が目の前に迫ると、「ようし、面白くなってきたぞ」と、自分に言い聞かせるようになったという。**よく、おみくじを引いて、大吉だ大凶だと一喜一憂する人がいるが、たとえ凶が出たとしても、「今年は慢心を捨てて、すべてに感謝して功徳を積むように」と、仏様が教えて下さったのだ、有難いことだ、と思うこと。**それが、凶を吉に変える考え方の基本だと考えていた。

《第２回世界宗教者平和会議》

「ディア・フレンド、グッドニュース！」で始まるジャック博士からのメッセージが届いたのは、昭和４９年２月のことだった。それは、１月末にオランダのアムステルダムで開かれた臨時小委員会の決定事項を伝える文面で、「第２回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰⅡ）を、８月２８日からベルギーのルーベン・カトリック大学で開催と決定」と報じていた。

こうした紆余曲折を経て、昭和４９年８月、ベルギーのルーベン大学に５３ヶ国から４００人を超える世界の宗教代表を集めて、第２回世界宗教者平和会議は開幕したのであった。　（つづく）

渉外部からのメッセージ

気が付けば残すところあと２ヶ月半で今年も終わります。そう言えば気が早いかもしれませんが、１年とはこんなに早いものかと感じされられますね。しかし詰まるところ１日１日の積み重ねには違いありません。５０年前の京都教会（支部）もきっと１人１人の救いに徹してこられたに違いありません。気が付けば５０年の歳月が流れてきました。そして当時の布教の第一線の方が今でも元気でご活躍されています。うれしくありがたいと共に、これからの私たちがその真髄を継承していかなくてはなりません。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266